

2007年度 卒業論文講評

2008年2月 小関 隆志

一ノ瀬 暁 「地域密着型サッカークラブの地域貢献」

日本のサッカークラブの多くは地域密着型経営を掲げ、かつてのような大企業お抱えチームから脱却して、地域住民や行政機関とのつながりを強めています。これはサッカーファンを増やして裾野を広げるという地域密着の経営戦略ではありますが、スポーツが地域の公共財であるため、住民から支えられることで初めて成り立つ、ということを示しているようにも思われます。いまではサッカーに限らず野球など他のスポーツにも地域密着型経営が普及し、注目を集めているようです。

サッカークラブのなかでも地域密着に成功した顕著な例としては、アルビレックス新潟やヴァンフォーレ甲府などが想起されますが、なかでも浦和レッズはさいたま市を拠点として多くのファンを獲得し、地元さいたま市の支援も受けて比較的順調な経営を続けています。一ノ瀬さんが浦和レッズを事例に選んだのは、もちろん彼が熱烈なレッズファンという理由もありますが、非常にふさわしいと思います。

地域密着型経営が登場した歴史的な背景・経緯もきちんと整理されていて、議論をしっかり組み立てられています。なかでも浦和レッズの事例の部分は地域密着型経営の実態を多角的に検証していて、よく書けています。顧客が増えるという、サッカークラブにとってのメリットだけでなく、自治体（さいたま市）にとっての意義や効果、地元の企業・商店にとっての効果など、さまざまな立場から地域密着型経営の意義や効果を考察していて、説得力があります。

一ノ瀬さんは、さいたま市役所でスポーツ行政を担当している職員にインタビューしたり、浦和レッズの社会貢献事業も調べるなど、積極的に調査を進めました。この論文には随所にその努力の跡が認められます。実によく努力しました。